

【実践報告】

教職実践演習（小）の概要と課題Ⅲ

広島文教女子大学人間科学部

教授 今崎 浩

教授 笹原 豊造

教授 徳本 達夫

教授 岡 利道

教授 杉山 浩之

教授 村上 典章

准教授 佐伯 育郎

教授 高橋 泰道

本年度は、「教職実践演習」が開講されて3年目の年であった。教員養成の最終段階として実践的能力の養成の仕上げの位置づけとなる本科目では、①15回の通常の授業と、②課題（指導案やレポートなど）の学修、学校を中心としたボランティア活動、各地の学校教育研究会への参加などの自主学習（15回分、24時間）の二本柱で展開してきた。①においては、指導案作成や模擬授業、場面指導などの実践的な内容を十分に取り入れることを教育方針とし、事例研究、グループ討議、ICTに関する技能の習得などを指導上の留意点とした。②に関しては、教員側が積極的に情報提供を行った。今年の変更点は、「特別支援教育の今日的課題」を新たなテーマとする講師を交替したことである。実際の授業の概要と課題をここに報告する。（授業運営責任者：杉山）

第1回「オリエンテーション」

本科目の趣旨と授業全体の進め方を説明した。学生たちは、履修カルテを見直し、自分の課題を考えたことがレポートから伺える。例えば、「一つ一つの授業で学んだことを思い返すことが出来ました。課題は学んだことをどのように実践していくかを考えることです。」「各教科において単元のねらいを把握する力が不十分だと分かりました。」「学級経営能力や授業実践能力がまだ不足していると分かりました。どのような学級を作りたいかしっかりとイメージしたり構想したりしておくことが大切だと思いました。」「生徒指導、教育相談及び進路指導に関することへの知識や指導について、教育実習中には何度もどのように対応すればよかったのかと反省ばかりでした。」「課題を解決するために現在小学校へ学習支援ボランティアで週3回行かせて頂いています。様々な校種の教員と関わることでできる研修会・研究会にも参加します。」「指導案や構想を効果的に実践する中で柔軟な考え方や様々な指導法、言葉の使い方を組み合わせて活用することがあります。」こうした課題に答え得る演習授業を展開しなくてはならない。（担当：杉山）

第2・3回「特別支援教育の今日的課題」

講師として古田寿子先生を招き、講演テーマ「特別支援教育の今日的課題」のもと、2回にわたり、発達障害をもつ子どもの教育方法について具体的な内容を学修した。第2回は幼児と低学年児童を中心にした内容であった。第3回は高学年児童と中学生を中心とするお話しであった。内容を要約すると以下のものであった。国連採択の「障害者の権利に関する条約」（2006年）が2014年、日本において漸く批准され、インクルーシブ教育が推進されている。中教審答申（2012）「共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育構築のための特別支援教育の推進」において「合理的配慮」の定義がなされた。合理的配慮とは、「障害のある子どもが他の子どもと平等に教育を受ける権利を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適切な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて学校教育を受ける場合に個別に必要とされるものであり、学校の設置者及び学校に対して体制面、財政面において均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」とした。合理的配慮の決定は「一人ひとりの障害の状態や教育的ニーズ等に応じて決定されるもので、興味・関心、学習上または生活上の困難、健康状態等の実態把握を行い、可能な限り合意形成を図った上で」行われる。例えば、自閉症の子どもの場合、視覚情報の指示、タイムスケジュールの活用、得意な活

動保障、個別的受容的関わり、カームダウンルームの確保などがある。行動の予見可能性と安全配慮義務、自傷行為誘発防止義務と自傷行為防止義務等の視点から様々な裁判事例も紹介された。学習障害の子どもに他の子どもと同じテキストで反復指導する「教育虐待的行為」、不安の強い子どもに「目を見て話す・視線を無理に合わせる・大きな声で話をするなどを強いる「一種の教育虐待」は禁止事項である。自閉症スペクトラムの子どもに対応する原則は、「具体的・肯定的・視覚的」手段で見通しが持てる指導が欠かせない。活動と場所を一致させたり活動場所の境界をはっきりさせたりする「場面整理」、興味のあることを大切にするなどである。氷山モデルの考え方が重要で、パニック・自傷・攻撃・破壊などの水面下には理解・伝達不足や感覚の特異性などがある。この水面下へ対応・支援が合理的配慮に繋がるものである。学生が書いた学修記録に対し一人ひとりに「あなたがのここが素晴らしい…と言われて育つ子どもが幸せです。子どもを幸せにできる教師になってほしいです」「子どもたちからいっぱい学ぶことがあります。私はかわいい！と思ってかかわる中で学び続けることが出来ましたよ」などコメントをお返し頂いた。(担当：杉山)

第4回「広島文教女子大学教育学会第31回研究発表大会への参加」

同学会の内容は二部構成となっている。Ⅰ部は「分科会」として、児童教育関係分科会、幼児教育関係分科会が設けられ、今年度の発表は次のとおりであった。

【児童教育】

- ・大崎 友子さん(25期生)「『ちがう かかわる かわる』授業の創造 ～国語科の実践を通して」
- ・山岡 陽子さん(29期生)「第1学年生活科 公園探検 ～五感を通しての季節見つけ～」

【幼児教育】

- ・岡田加世子さん(27期生)「たのしいクラスづくり ～保育園大好き、友達大好き～」
- ・福原 亜紀さん(14期生)「～『命』をテーマに～ 園児のやりたい やってみたいを大切に」

発表内容はいずれも実践的な内容で本授業の趣旨に沿う内容であり、発表者が自らの実践を熱く語ってくれたことによって、来春から教壇に立つことへの期待、学び続けることへの意欲の高まりが学生のレポートから感じられた。

Ⅱ部は「講演会」として、本学教授 徳本達夫先生から「応答する身体(からだ)～知った責任・知らないことへの罪」という演題でお話を伺った。先生は自らの人生を語られることを通して、教壇に立つ者はどうあるべきか、教職の根本について改めて考える機会を与えてくださり、貴重な学びの場となった。(担当：今崎)

第5回「学級通信の意義と作成方法」

学級通信の意義・役割、留意事項、作成方法等についての講義を行った。事前学修としては、各自が保管している学級通信を探しておくこと、自分のクラスの学級経営について考えておくこと、1年次の教師論テキスト(佐伯作成の自主創作教材)に掲載されている学級通信の例を見ておくことを設定した。事後学修では、本授業での学びをもとに、学級通信を各自作成した。学生たちは、手がきの味を生かした通信、パソコンで作成した通信、手がきとパソコンを融合させた通信など、様々な通信を作成した。中には、卒業論文と絡めて、手がきとパソコンの両方を提出した学生も1人いた。学級通信を保管している学生、自身が在籍したクラスの学級通信について記憶している学生が多く、本学への入学以前から教職に対する意識が高かったことがうかがえた。最終講では、学生が作成した学級通信を6例紹介した他、学生が4年次の中学校教育実習中に作成した実習生通信も紹介した。国語科の授業で配付したものであり、生徒作品とその解説、学生による評価が掲載された手がきの通信であった。その他、教育実習中に配属学級の学級通信を作成した学生、道徳通信を作成した学生などもいた。(担当：佐伯)

第6回「教室環境づくり」

教室環境づくりとそのあり方について講義を行った。教室環境の作成方法、留意点を上げるとともに、教室外の環境づくりについても補足した。事前学修としては、教育実習(観察実習・本実習)、

学習支援ボランティアや公開研究会などで見てきた小学校の教室環境を振り返る課題を設定した。事後学修としては、教室環境づくりの案を各自構想した。教育実習などで見てきた教室環境例、自身が構想する学級経営案が反映された教室環境となっていた。今年度から本授業で実施された特別支援教育に関する学びも取り入れ、児童の集中力を妨げないようにするための刺激の少ない教室前面、学びの見通しを持たせるための行動ルールの明確化など、学びの成果を教室環境計画に盛り込んだ学生も見られた。授業で使用するPowerPointには、広島市内の小学校に許可を得て撮影させていただいた教室環境例を提示している。今年度は、昨年度に引き続き教育実習Ⅶ（観察実習）でお世話になっている小学校の教室環境も取り上げ、参考例をより充実させた。今後、さらに取材校を増やし、教室環境づくりの参考資料として学生に紹介していきたい。（担当：佐伯）

第7回「教育時事問題」

1.（教育）時事問題への興味関心は、現実の世界を生きる児童に関わる教員には必須の作業である。表層部分ではなく、底流部分で蠢いている本質に目を向ける感受性が必要である。最近、とみに憂慮されている知性の劣化を防ぐため。教育における不易と流行の問題として考える姿勢である。

2. 授業では教育における中立性を論じた。18歳年齢選挙権の実質化は、長期的な視点から民主主義的主権者形成の教育・学習が欠かせない。世界の潮流に反して、18歳年齢選挙権の実現を阻んできたのが日本の保守層。教育に新聞を。小学生時点から大事にされている。歴史的社会的な観点も踏まえた情報をもとに面や立体としてことがらを捉える姿勢が求められる。関連する新聞記事を一読し、共通の土俵に立って討論する。この作業が民主主義的な主権者教育になる。教育における中立性の根拠は教育の条理や倫理である。この国は立憲主義国家である。法律主義である。多数決原理の根本を理解しない、結果として数の暴力によって成立した法律が教育の条理や倫理に則しているかどうかは検討の余地がある。安全な言い方をすれば「不明」である。

3. 学生の時事問題への関心は驚くほど低い。本学教員採用対策セミナーの一環としての集団討論セミナーでは（教育）時事問題も活用した。実際生活はすべて時事問題に関わる。個人的なことはすべて社会的なこと。「良識ある公民たるに必要な政治的教養」（教育基本法）の一端はこうした時事問題への関心から生まれる。大学教育の質保証となる思考力・判断力・表現力、問題解決力、コミュニケーション力、等々は総じて言えば、参加民主主義的教養の育成に繋がる。道德教育がめざす価値選択の主体性形成である。民主主義的主権者の育成である。一人ひとりの個が自己・他者・世界・自然に対する最大限の責任性を自覚し続ける。永遠に「未完のプロジェクト」である民主主義社会の実現に向けての参加である。多文化共生の観点から人間が類として生存し続けることのできる文化・経済・政治・教育のあり方を土台の部分として支える価値観である。1947年教育基本法が強調する観点でもある。（担当：徳本）

第8回「道德の模擬授業」

1. 授業構想 道德授業の特別教科化の意味と問題点を、道德教育指導法Ⅰの振り返りを主として展開する。資料は、『文教教育』所収の小文と「手品師」授業報告書。道德教育指導法Ⅰ等で配布した資料、文部科学省『小学校学習指導要領解説道德』、同『生徒指導提要』。

2. 授業の実際と課題 今日の子どもや教育を取り巻く諸問題を解決するために、道德授業ができることを考える。実習先の児童生徒の実態に絡めて、道德的実践力をもった児童生徒像へと児童生徒が変容するための道德授業とは何か。授業はすべて教員の人間性・専門性がにじみ出る。人間的な生き方を探求し続ける中で道德教育は実質的なものになる。教職をめざす過程でどこまで価値的に高い教員に向けて自己形成しているか。そのような自己形成を続けることがそのまま今後の課題になる。教育はアートである。生き方の芸術としてのアートを、それぞれが自分で創造する。そこに他者が関わる。もともと違う存在が互いにねんごろに関わることによって変わっていく。自分の潜在的な資質能力が他者との関わりを通して、開花していく。「ちがう・かかわる・かわる」（大田堯）。

3. 教育史・教育哲学者宮沢康人が強調するように、人類は「ホモ・ファーベル」（工作人）とい

う人間観を持って生きてきた。自然に包摂された人間像ではなく、自然と対立する人間像である。自分が人類の背後にある、35億年の歴史を背負って生きているという感覚は生まれにくい。35億年の歴史とは人間の歴史ではなく、人間が誕生するはるか以前の自然の歴史である。自然に対する畏敬の念を欠いた「ホモ・ファール」は、これまで幾多の人工物を創造してきた。現在進行形の原因問題に向き合うためにも、本質的な学びが欠かせない。教育における「中立性」を教育の条理や倫理から捉えない限りは、論争的な主題を避けるような自己規制の風潮が広がるだろう。特別教科化された道徳がめざす「考え、議論する道徳・問題解決型道徳」の標語はかけ声だけに終わりがねない。(担当：徳本)

第9回「国語・算数科の模擬授業（2クラス）」

算数科の授業づくりについては、授業担当者による学年最初の算数科の授業、いわゆる「授業開き」の模擬授業体験、それについての協議、授業担当者からの解説を行った。具体的な内容は、「こんな授業を目指したい」、「ノート指導」、「教科用図書の活用方法」、「家庭学習の内容とその評価」であった。

授業後の感想から、学生はこの学修を通して、教師は学年をスタートするに当たって、「どのような算数科の授業をしたいのか」、「どのような能力や態度を育てたいのか」という明確な目標を持っておくこと、また、それらを具体化するための多様な指導方法と計画をもって授業に臨むことの大切さを再認識してくれたようであった。(担当：今崎)

テーマを「国語科の模擬授業一言語活動の授業改善を 具体的にどう進めるか」との角度づけをした。国語科の模擬授業を展開する中で、諸課題を出し合い、より確かな授業実践のあり方を見出したいと考えた。この度は、昨年度のように学生が授業者となることはせず、それぞれのクラスで児童役となってもらい、客観的な立場から模擬授業を見つめてもらった。授業者は、一昨年度のように岡が務めることに戻した。算数科のグループと同時展開されており、両グループとも比較的少人数であることのよさを生かし、じっくりと観察・考察できるためである。授業は、第2学年単元「くらべてよう　じどう車くらべ」で、45分をかけて実施した。本年度は、最新のID（インストラクショナル・デザイン）理論研究の成果を盛り込み、課題分析に基づく、意図的・計画的・体系的指導を提示した。それぞれの学生が、実習時あるいはこれまでに何らかの形で体験してきた説明文の授業を振り返り、学習者が確実に学習成果に到達できるところの指導方法論の考究へと仕向けるようにした。(担当：岡)

第10回「小学校での英語教育について」

小学校での英語教科化が加速している現状と、未来の小学校教員として今後の課題を確認した。

従来の英語教育と訣別し、コミュニケーション重視を明確に打ち出した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』（文部科学省、平成15年3月31日）を基に、政府が意図する方向性を確認した。（国民全体の英語教育の【目標】の明示、英語教育改善のために講じるべき様々なアクションの提示など）2020年の東京オリンピックを目処に計画されている、小学校英語教育に関する制度設計を確認した。（小学校中学年：週1～2コマ程度、活動型、学級担任中心に指導、小学校高学年：週3コマ程度、教科型、英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員、2018年から段階的に実施し、2020年に全面実施予定）小学校教員としてどのような力量が求められるのかを最後に確認して、今後の課題とした。具体的には、本学で設定している児童英語教員養成のカリキュラムで設定している目標である。（異文化への理解、英語でコミュニケーションを図るための基本的な能力、授業を構成する能力など）(担当：笹原)

第11回「学級経営と学級活動」

本講義では、教育現場に出た場合に最も必要に迫られる学級経営について取り上げ、学級活動の指導案を作成することを目指した。具体的には、学級における学級担任の役割と配慮事項を確認し、話し合い活動の意義と方法について説明した。そして、事後学修で学級における生活上の諸問題を解決するための話し合い活動を題材とする指導案作成を課題とした。昨年度は、事後学修の内容を理解していない学生がおり、欠席者への連絡も含めて指示を徹底することが課題であった。そこで、講義

の最初と最後に事前学修、講義内容、事後学修について確認することに留意して指導を行った。その結果、今年度は事後学修の内容に関する誤認はなかった。ただ、指示した課題以上の指導案を主体的に作成して提出した学生もあり、結果的に学生間の差が大きくなった。この点を次年度の課題とする。(担当：村上)

第12回「ICT機器の教科指導への活用」

I C T機器活用の良さと問題点について、グループごとに話し合い、実際にipadを使って、考えをまとめ、発表を行った。その中で、今求められている情報活用能力の必要性、有効性や現状について、実践事例を通して解説した。また、実際にどんな I C T機器を使い、授業を展開するのか、指導案の作成も行った。今後の課題としては、ICT教育に関する学修について経験がない、あるいは少ない実態が挙げられた。今後はさらに模擬授業などでの I C T機器活用の頻度を増やすなど、実際に I C T機器を使用する機会を増やすとともに、本授業までに、学生自身が研究会、研修会等に参加して、基礎的な面を学んでおく必要があると感じた。(担当：高橋)

第13回「さまざまな生徒指導事例と場に応じた対応」

本講義では、生徒指導事例をいくつか取り上げ、その多様性を共通理解し、場に応じた対応の必要性和それに関する基本的な考え方を説明した。次に、休憩時間中の事故の事例について個人で対応を考えた後、全体で確認を行った。その後、事後学修で多様なケースを想定しての指導構想案作成を課題とした。昨年度、共感的な理解の側面が弱いという課題があつたので、今年度はその部分に時間を割いた。そのため、グループでの検討の時間がなくなったが、児童の気持ちを受容しながら共に考えていくことの大切さに気づいた学生が多かった。ただし、事後学修の際、講義で取り上げた事例に類似した事例を取り上げた学生や他の学生と同じ事例を取り上げた学生が多かった。これは、本講義だけの問題ではないが、一人で考え、判断することから回避しようとする心理が作用したとも考えられることから、自己判断、自己決定の重要性を一層強調することを次年度の課題とする。(担当：村上)

第14回「研究会参加とボランティア活動の成果報告とまとめ」

冒頭で、研修の意義、研究会やボランティア活動に参加する意義について確認した。その後、各自が参加した研究会の様子、ボランティア活動の様子について、グループ単位で情報交換を行い、その要点を用紙にまとめ、発表を通して、学びを深め合った。ボランティア活動については、実際の教育現場に触れることにより、学校・学級の様子、子どもの様子、地域・保護者との関わりの様子などを教育実習以上に学ぶことができ、今後の自分の教職現場での在り方について考える機会となったようであった。また、研究会に参加することにより、授業研究について学ぶことができたようであった。さらに、授業研究の大切さ、楽しさについて補足し、学び続ける教師としての意欲を高めるようにした。課題として、昨年度もボランティア活動や研究会に参加した活動報告書を本時までに作成してそれを基に、話し合うことを挙げたが、実施時数年内では不足し、1月まで成果報告を待たざるを得ない面が見られた。(担当：高橋泰道)

第15回「まとめ」

授業担当者から一言ずつ最後のコメントが述べられ、その後、学生は授業の振り返りとコメントに対して、学修のまとめを記録した。一例を紹介する。

「本授業を振り返りつつ先生方の話を聞き、これから教壇に立っていく不安に思っていたことも多くあるが、それでも大学で学んできたことに自信を持って胸を張って自分の理想とする教師となるべく努めていきたいと意欲を持った。大学に入るまで漠然とした理想であつたが実習やボランティアを通して様々な子どもたちに出会い、私は子どもの心に寄り添い、学級が誰にとっても心地よく安心できる場となるように日々成長していきたいという目標を持つことが出来ました。」「この授業を通して社会人としてのマナーも学ぶことが出来ました。4月からは積極的にチャレンジし、日頃からの研究や人間関係を築いていくことも怠らず取り組んでいこうと思いました。」これらの学生たちは本授業を振り返りつつ新たな目標を持つことが出来ている。

本授業後は、これで3年を修了したが、本学の教育課程が改訂され、次の学習指導要領の改訂が予定されている中、シラバスの改善が必要ではないだろうか。また、学修記録から学生が把握した課題を拾ってみると、「外国語活動（英語科）の指導案作成や模擬授業を行っていない」「音楽や体育の授業展開が苦手である」ことが分かる。この点も次年度以降の課題としたい。さらに、これまでは実施して来なかった「授業に関するアンケート調査」を実施し、シラバス改善に反映するシステムを作ることも今後の課題としてあげられる。（授業運営責任者：杉山）